

間接伝達論的論理学 第2部・注釈部(その11)

清水 茂雄

Die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik

Zweiter Teil • Anmerkungen <11>

Shigeo SHIMIZU

Zusammenfassung : In dieser Abhandlung als der elften Anmerkung für die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik möchte ich besonders die Beziehung der Quantentheorie auf das außerhalb des Tors existierende Gebiet der mittelbare-mitteilungstheoretischen Logik erörtern. Das außerhalb des Tors existierende Gebiet bedeutet hier die Natur als eine Stufe der Logik. Aber das Gebiet muß sich von der Naturphilosophie Hegels unterscheiden. Das Wort (Shingon) kann nicht im außerhalb des Tors existierenden Gebiet das, was es sei, sagen. Dieser Umstand des Wortes wird <Shosoku-fumei> genannt. Aus der Erörterung wird es deutlich, daß die Quantenmechanik sich auf <Shosoku-fumei> gründet.

Key words : Quantenmechanik (量子力学), die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik (間接伝達論的論理学), Naturphilosophie (自然哲学)

はじめに

この論文は、拙著『間接伝達論的論理学』(飯田女子短期大学刊, 1996年)の第2部である「注釈部」を成す一連の諸論文の一つである。したがって、その叙述形式もこれまで公表してきた同様の論文と同じものとなる。最初の番号は、「注釈部」全体の通し番号であり、この論文では44番目から始まる。続くカッコ内には『間接伝達論的論理学』本文のページ数と行が示され、その下の< >で囲った文あるいは語句が注釈されるべきことからである。なお、「注釈部」という性格上、引用文の末尾にその引用文献について記述する。

44. (P.34, 14行)

<主語－述語関係にはこの「非－伝達」とい

うことが避けがたくまわりついているのである>

ここで語られていることは、人間存在の孤独ということと関係する。しかし、より根本的には、弘法大師空海の言うところの、「衆生秘密」というようなことがらに關係する。すなわち、ここで、「非－伝達」と言われていることは、人間存在、あるいは、意識存在が固有に抱えている孤独という根本問題に関わることである。

通常、我々人間は、他者といわゆるコミュニケーションを取る時には、何らかの仕方、主語と述語の關係において伝達を行っている。たとえば、「今日は晴れですね」などである。もっとも、この形式に当てはまらぬ言語様態は多くある。たとえば、「すぐ行け」、「きれいだね」などである。あるいは、そもそも言語

を使わない伝達も可能である。以心伝心などということも有るのである。しかし、ここで考えられている「主語－述語関係」は、そのような伝達様式の一つというようなことではない。ここで言われている「主語－述語関係」は、言葉が語る言葉（人間が語る言葉ではない）のある位階というようなことなのである。すでにこれまでの注釈で述べたように、この「位階」を固有のエレメントにしている論理学がヘーゲルの「論理学」である。この「位階」は、その全体をそれより高い、あるいは、それより「より先立つ」位階との関係からいうならば、「公開的」という本性をもっている。これに対して、「より先立つ」位階は、「秘教的」ないしは「密教的」と名付けられるべきである。

「公開的」な位階においては、言葉は、「主語－述語」関係をとるのである。それゆえ、この位階に在る人間存在は、「主語－述語関係」においてコミュニケーションを行っているといえる。したがって、どんなコミュニケーションの形態を取ろうと、たとえ、身振りによる伝達をしようと、人は、「主語－述語関係」において伝達を為しているのである。これは、極端な意見というようなものではなく、公開的位階に立つ限り、そうなのでなければならぬ。人々は、相互に「主語－述語関係」の中でコミュニケーションを為しているのである。

しかし、このような「主語－述語関係」は、本質的に「非－伝達」である。すなわち、この公開的位階においては、何かが話され、何かが知らされ、いかにも、すべてが公開されることのできるように見えるのではあるが、しかし、人々は、本質的な孤独の中に閉ざされるのである。なぜなら、公開的位階にある限り、言葉はまったく語ることができず、この言葉そのものの語りだされぬことが、人間が孤独になっていることになるからである。言葉が語る言葉になっていないかぎり、言葉は、閉ざされ、この閉ざされていることが、

人間が他者と本来的にコミュニケーションが出来ないことの原因となるのである。人と語ることは、このような孤独をいわば糊塗することである。誰かとコミュニケーションを取ろうとすることは、その背後に伝達が「非－伝達」となっていること、本質的に自分が孤独を打破できないことを語っているのである。

したがって、逆に、「秘教的」位階において、人間は、本来のコミュニケーションを行うことが可能になるといえる。なぜなら、そこでは、言葉が語ることができるようになり、それによって人間も言葉が為す本来的な伝達に参与することが許されるようになるからである。これまで、苦しんでいた「非－伝達」の閉塞性が無くなるのである。

人間が相互に理解し合えるようになることは、公開性の位階においても一見可能のように見える。しかし、厳密には、伝達は、言葉が語ることによってのみ可能なのである。このことが生起しない間は、かの「非－伝達」の支配が続くのであり、人々は、この中で相互に理解しようと一種の悪あがきをすることになる。人間本質が本来的には、言葉の語る言葉に「聞く」という意味をもつ以上、人間存在は、伝達を根本的に求めている。しかし、この伝達は、誰かと理解し合うということを目指すのではない。誰かと相互に理解し合うことを求めるのは、我々がまだ「非－伝達」の中に在って、閉塞性に悩んでいるからなのである。我々の根本孤独を癒そうと、他者との理解を求めるのである。ゆえに、仮に我々がなんらかの意味で他者と理解し合えたからといって、我々の根本的孤独が真の意味で解決されたわけではない。そこでは伝達そのものが本来的に生起してはいないからである。伝達するところのものは、言葉であり、まだ、「言葉が語る言葉」が言われていないかぎり、言葉は、人間に孤独の閉塞の恵みを贈り続けるのである。

言葉そのものが語れない故に、人間同士が

コミュニケーションを必要としているのである。そして、コミュニケーションが為されるかぎり、人間は孤独である。なぜなら、言葉は依然として語れないからである。ゆえに、もし、ある人間がこのことに気付くようになると、その人はまちががなく、孤独地獄に入ることになる。なぜなら、彼にとって、この世的な一切のコミュニケーションは「非-伝達」の相貌を顕し始め、したがって、それは、孤独を深めることでしかないからである。しかし、このことに気付くようになるということは、かの本来の伝達に呼びかけられたということでもある。言葉の方からのこのような呼びかけに応じる詩人的な(孤独な)魂は、必然的に孤独地獄に陥らざるを得ないであろう。かつて、芥川龍之介が入ったとされるこうした孤独地獄は、孤独に対する本来の解決をめざすものに他ならない。詩人的魂は、単に孤独を癒す(自己をだますこと)試みをすることはもはや原理的にできなくなっているものであり、他者とのいつわりのコミュニケーションではなく、伝達そのものを求めているのである。

ところで、公開的位階は、このようにして、本質的に孤独の魂が相互にその孤独の閉塞に悩みながらこれを秘し、コミュニケーションを計ろうとしているある言葉の境地なのであるが、すでに、こうした「秘すこと」は、空海によって「衆生秘密」として認識されていたことである。孤独とこの「秘すこと」には深い脈絡があり、そのこと自身がまさに、「衆生秘密」と呼ばれるべきである。空海の『弁顯密二教論』には次のように言われている。

「いわゆる秘密にしばらく二義あり。一つには衆生秘密、二つには如来秘密なり。衆生は無明妄想をもって本性の真覚を覆蔽するがゆえに衆生自秘という。」(松本照敬：「密教経典入門」, 東京書籍, 1991年, p.110.)

つまり、言葉(真言密教の真言と同一ではないがある種の脈絡はあるであろう)が語る

ことができないがゆえに、衆生、すなわち、コミュニケーションを必要とする人間存在は、「秘する」のである。それは、人間の心のもっとも奥深く「秘されたこと」であり、孤独地獄はこの「秘すこと」に根がある。もちろん、この「秘す」ということは、なにかを隠しているということとはまったく異なることであり、かの「非-伝達」の故にそうなのである。人とコミュニケーションを取りたいという想いも、この「秘す」ということから起きてくる。誰もこの閉塞、「秘す」のダイヤモンドの殻を打ち破ることはできない。ゆえに、孤独地獄に陥ることが有り得るのである。自分に「秘す」ことがありながら、すなわち、自分の心を最後のところでは閉ざしながら、コミュニケーションを図ろうとすることは、他者に対する深い意味での不誠実であるが、公開性の位階では、このような微妙を極めることは、完全に、蓋をされているのである。誰でもこのような不誠実を行っているのである。

かくして、他者に対する誠実さとコミュニケーションとは別の伝達をもとめる本質的に詩人的な魂は、孤独地獄を脱底して、「秘教的」位階に登らなければならない。そこは、かえって、秘密の境地であり、空海が、「如来秘密」と呼ぶある境地である。その位階は、公開性が無くなっているのであるから、公開性の位階からは、隠しごとをしているように思われるのであるが、実際は逆であり、そこは、かの「衆生秘密」のダイヤモンドの殻に囲まれた孤独閉塞性から解放された本来の伝達の間、他者と真に理解しあえる場なのである。

人間の心と呼ばれるものは、本質的に上記の「秘する」から出来ているといえる。それは、「非-伝達」によって「秘する」となっている苦しみである。「非-伝達」の悩みを本質とするある言葉の出来言の派生態である。すでに述べたように、この「非-伝達」は、言葉がまだ語りだすことができないということ

であるから、「秘する」とは、言葉が語りだせないということの派生態、ないしは、それが「私」化したものといえる。「私」化ということは、言葉といういわば、非人称のことがらが、それが覆われることで、一人称として私の経験になってしまうということである。ゆえに、「非-伝達」は、本来、言葉から由来し、言葉のことがらであるのに、私の事態となる、すなわち、「非-伝達」に「私が悩む」となるのである。「秘する」のも私の心の奥所であり、それゆえに、他者に心が通じないのである。この「秘する」心がコミュニケーションを求める心である。実は、私が悩むのは、私が他者と心が通じないからであるのではなく、(言葉が)「非-伝達」に苦しんでいるからなのである。同様に、コミュニケーションを取ろうとする他者も同じ悩みを抱えている。しかし、相互に「非-伝達」に悩んでいるのであり、コミュニケーションは、この相互にもっている根本苦悩の表現になっているのである。コミュニケーションによって他者と心が通じたと思うのは、ひとつの錯覚である。コミュニケーションによって我々は、むしろ、本格的な孤独を自覚することになるのが、正常ということになる。なぜなら、我々は、自分の心にどこまでもなにか他者と通じ合えないものがあることをまさに、コミュニケーションから学ぶからである。心の悩みは、この「通じ合えない」ということであり、「非-伝達」の故に私の心が「秘する」ということを根源にしているのである。ダイヤモンドの殻に囲い込まれたことが自覚されるようになった心は、すでに述べたように、孤独地獄を経験することになる。「非-伝達」の恐怖というようなことが起きてくるのである。おそらく、芥川龍之介もこのような難所に到達したのではないだろうか。彼にとって解決は自殺しかなかったのかもしれない。心の悩みはかくまで深いのであり、それは、「論理学」のことがらなのである。悩みといってもなにかロゴス

のことがらであり、したがって、ことわりがはっきりすればその悩みから解放される。言葉がまだ語りだせないこと、「伝達」の場が開かれないこと、そこに私の心の悩みが派生発生しているのである。心が「秘す」ことは、「非-伝達」を隠していることであるともいえる。自分の心に閉ざす本性があることを隠すのである。そして、この閉ざす本性にみずから苦しむのである。しかし、心は本来、「秘する」のでなければならぬ。我々は、どこまでも「衆生秘密」になっているのである。苦しむのは、「私」であるが、同時に言葉も「苦しさ」を「私」を通じて語っているのである。

こうして、公開性の位階では、心が「非-伝達」に悩んでいる。孤独に悩んでいる。しかし、位階秩序から見れば、そこは、ある正義にかなっている処といえる。なぜなら、全体としては、言葉の位階は、伝達のことには属して、本質的に、正義の秩序を構成するからである。位階は、厳密には4つあり、公開性の位階は、上から、第3番目の位階になっている。第2番目より上が「秘教的」ないしは「密教的」位階である。公開性の位階では、心は悩むのであり、それは、正義にかなったことである。あらゆることが公開されることができこの位階において、「秘する」心の悩みを「私」は経験するのであるが、それは、根本的に正義にかなったことなのである。誰でもここで、いわゆる「シャバ」で、苦悩するのが正しい。我々の心の悩みは、単に個人的なものではなく、むしろ、位階的な、ある正義の法にかなった、政治的なことがらである。

45. (P.35, 5行)

<またこの「非-伝達」ということが「主体」に対する客観として見られるときには「非-伝達」の極致としていわゆる「第一質料」が「有る」ということになる>

44.の注で示されたように、「非-伝達」は人間の心の秘密、つまり、「秘する(衆生自秘)」

ということに関係する。しかし、「非-伝達」は、言葉が語ることができなくなっていることであるから、主語の側のことがらにも関係しなければならない。すなわち、言葉が「主語-述語関係」の中に自己を忘れてということが、一方で、人間の心の根本閉鎖性を派生させるとともに、他方で、物(対象)の側での自己閉鎖性を派生させるのである。物の方に自己を閉ざすような本性が出現するのであり、この極致が「第一質料」と呼ばれることがらである。

「第一質料」の問題は、本質的に自然の本質の問題と関係するのであるから、間接伝達論的論理学の「門外領域」で論じられるべきである。「門外領域」の考察は、それだけで一冊の著書になるくらいの大掛かりな内容となるので、ここで、詳しく解説することは差し控えたい。

しかし、「門外領域」の根本語であるア・ロゴスについて少し解説をしておきたい。なぜなら、「非-伝達」ということは、このア・ロゴスの「ア」ということと関係するからである。

ア・ロゴスは、ギリシア語(alogos)から由来する形容詞であり、「不合理な」という意味をもっている。しかし、間接伝達論的論理学としてのア・ロゴスは、言葉が述語の側に帰還することができなくなり、自己を完全に見失って、転倒夢想的に己から逃走することを意味する。このようになった言葉の有り方が「動く(運動)」ということであり、ここに自然界が成立するのである。「門外領域」とは、言葉が転倒夢想して「動く」ということになった領域である。言葉の転倒夢想的言い方がア・ロゴスに他ならない。故に、「ア」は、否定辞であるとともに、つまり、ロゴスではなくなっているということの意味するとともに、また、転倒していることを意味するのである。自然の世界は、ヘーゲルが言うように、本質的に「解消されない矛盾」であり、「不合理」である。

かつて、エレア学派の哲学者たちは、運動

が不可能であることを主張した。AからBへと物が運動するとき、その二分の一の点を通らなければならない。そして、さらにその二分の一、つまり、四分の一の点を通らなければならない。そして、更に二分の一、以下、無限の二分の一の点を通過しなければならない。こうして、物は無限の時間を経て動く必要がある。しかし、これは運動ができないと言うに等しい。しかし、物は、現実には確かにAからBへ動くことができるのである。これは、運動が不可能なのではなく、運動とは不合理なことがらであるということの意味すると考えるべきである。運動は、「解消されぬ不合理」なのである。運動は、どうしても合理的に説明できないことでなければならず、それが運動の本質を構成しているのである。運動は、ア・ロゴスである。

ところで、ア・ロゴスのアは、言葉が自らを見失ったということに起因する。それは、伝達が閉ざされ、覆われることでもある。そして、そのお陰で、人間の心は「秘する」ことになり、そこから心の悩みが起きたのである。同時に、この見失いが言葉を転倒夢想の境位に去らしめ、自然界を成立せしめることになる。自己を完全に見失った先にアの極致が考えられることになるが、それは、形相を完全に無くしたものとして「第一質料」と言われる。それはまた、人間の心の最深の暗闇、「秘する」の暗黒、孤独地獄に対応する。物質の物質性、おのれを完全に閉ざすもの、それが、また、我々の心の暗闇、孤独地獄と一致するのである。ゆえに、心の悩みは、我々の心の物質性から起きているともいえる。

このようなわけで、もしも、コミュニケーションが本来の意味での伝達となり、「衆生秘密」から「如来秘密」への移行が成就されるならば、その時には、人間の心の悩みの根源的闇にいわば暁の光が差し込むとともに、物質の物質性も同時に解消されることになる。物が何であったのかが解き明かされるのである。

46. (P.35, 14行)

〈しかし、ヘーゲルは「間接伝達」に至って
いなかったの、粒子にして波動という今日、
量子論とよばれることを予見することはでき
なかった。粒子と波動の矛盾は主語－述語関
係に潜む矛盾と考えられる〉

量子力学において、粒子と波動との連関は、
今日でもまだ、十分には解明されていない。
Schrödinger (シュレーディンガー) の波動方
程式における波動関数 (以下、波動方程式、
波動関数と略記) の意味することは、一般に
は、次のように解釈される。波動関数 $\psi(r, t)$
の絶対値の二乗はその位置に粒子が見出され
る確率に比例する、と。粒子の系についてそ
の状態が確率を与えるような関数で表示され
なければならないのは、その系を測定する場
合に、たとえば、光を当てるなど、その系の
状態を乱すような操作をしなければならない
ためとされる (ハイゼンベルク不確定性原理)。
しかし、電子が回折像を作るのは、この確率
の波が干渉するためとされる。つまり、測定
の誤差を考慮しての確率的表現であるはずの
波動関数そのものが干渉ということの原因と
なるということになる。測定の誤差というこ
とを考慮して、波動関数的な表示にする場合
には、最初から、粒子が前提されていて、光
子が当たることで位置と運動量の決定に不確
定さが出てくると考えるのであるが、確率の
波が干渉するという場合には、この前提がと
られていないということになる。つまり、最
初から粒子は、確率の波になっているのであ
る。そこで、このような最初からの状態であ
る確率の波が同時に粒子としてのふるまいを
する以上、「いつ、どのようにして」広がって
いる波が粒子に局所化したのかということが
問われることになる。コペンハーゲン解釈と
いうものが可能になるのもっともだといわ
ざるをえないであろう。かつてシュレーディ
ンガーは、粒子などはなく、ただ、波だけが
あると考えたが、これは、もっともな見方で

あったということになる。しかし、確率は、
そこに粒子が見出される確率なのであるから、
粒子はこの確率の波と本質的な関係にあると
考えるべきであろう。フォン・ノイマンは、
波動関数に関するかぎり、このような、いわ
ゆる収縮は起こらないことを数学的に証明し
たのである。粒子はパイロット (またはガイド)
波という波に乗ってガイドされているの
であるという解釈も出てくることにもなるの
である。

さて、一体、量子力学に関する「解釈」は、
必要であるのだろうか。むしろ、量子力学は、
ある原理から必然的にそのような解釈を求め
るような事態を引き起こしているのではない
であろうか。以下、筆者は間接伝達論的論理
学の「門外領域」の基本となる思想に基づい
て、このことを論じてみたい。なお、ここ
では詳細な論究はできないので、更に詳しい考
察は、45の注で言及された「間接伝達論的論
理学の門外領域」に委ねたい。また、「間接伝
達論的論理学の門外領域」の基本的な洞察内
容について知りたい人は、『間接伝達論的論
理学』の「門外領域」のための序説』(清水茂
雄, 哲学論集, 第55号, 15-32, 2008) を参照し
てほしい。

しかし、以下の考察に必要な限り「門外領
域」の基本的術語を解説しておきたい。

最初に、「門外領域」とは、カントの「超越論
的論理学」のエレメントとなっている、間接伝
達論的論理学から見られた「主語－述語関係」
の論理学的境位のいわば「外」に広がる領域
である。そこでは、言葉としての言葉 (人間が
語る言葉ではなく、言葉が語る言葉、以下、こ
の46の注でのみ明確化するために〈言葉〉と
表記する) は、主語の向こうへと迷いに迷っ
て (二重に迷う、つまり、自分が迷っている
ことも全くわからなくなるほど迷うこと) 有
らぬ向きに自己の生誕地 (テロス) を転倒夢
想的に探すのである。こうして、迷いに迷っ
て主語の向こうに生まれ故郷を探す〈言葉〉

は、そこから自己を取り戻して戻ってくる境位からは、「門外」に出て行ったという意味をもつ。かくして、「門」が措定されることになり、〈言葉〉は、これを境にして、「入門領域」と「門外領域」にその境遇を分かちことになる。前者がカント哲学のエレメントであり、後者がいわゆる「外界現象」、すなわち、自然の世界である。古来より、哲学的に「内・外」ということが不明になっていたのであるが、いまや、どうして内界と外界があるのが完璧に明かされたことになる。

「門外領域」に出て行った〈言葉〉は、本来的には、述語を失う。つまり、それはある普遍によって規定されることができない。言い換えれば、そこで〈言葉〉は、自己を見失って自己から逃げていく。これが「運動(キネーシス)」ということである。ゆえに、「動く」という述語が主語に付けられることは、主語に対する本来的な規定をしているのではないことになる。「動く」という述語は、実は、〈言葉〉が「門外」に出て行ってしまい、「どうなったかわからなくなった」ということを言うことであり、述語ができなくなっていることを言う述語なのである。ゆえに、あるものに「動く」と述語付けることは、実は、そのものが「どうなっているかわからなくなっている」ということを語ることに他ならない。述語についてこのようにして不特定になっていることを「消息不明」と表すことにする。「消息不明」とは、安否が分からなくなっているとか音信不通になっているということではなく、〈言葉〉がどうなっているかと言えなくなっていることである。しかし、「消息不明」は、また単に、主語が未規定であることを意味しない。未規定ということは、一つには、やがて規定できるようになるという意味と、そもそも規定不可能という意味をもつ。しかし、「消息不明」ということは、主語についてなにか規定ということが可能になっていることを前提にしているのでなく、それとは全く別の事態であ

り、〈言葉〉が転倒夢想して主語の向こうに自己の生誕地を探ることなのである。すなわち、それは〈言葉〉の或る特別の境遇である。

こうして、運動ということが自然界(外の世界)の本質的事態となる。すでに、アリストテレスがこのような本質連関を洞察していたことは周知の通りである。しかし、運動が「消息不明」と「同じこと」である、ということはアリストテレスも気付くことはできなかった。〈言葉〉の方から見れば「消息不明」になっていることが、「門外領域」の内部では、「運動する」ということになっているのである。しかし、〈言葉〉が「運動する」わけではなく、「運動する」のは、もはや〈言葉〉とは別物、まったく〈言葉〉の姿から懸け離れたものが「運動する」のである。これがつまり、「運動するもの」である。我々は、我々の外にこの「運動するもの」を見る。

ところで、「消息不明」と運動とは、このような一体的関係にあるが、この関係は因果関係ではない。なぜなら、「消息不明」が原因になって運動が結果するのではないからである。そうではなく、「消息不明」になっていることが即、運動ということなのである。〈言葉〉が門の外に出て行ったということは、それが「門外領域」で「どうなっているかわからなくなっている」ということであり、これが運動ということになるのである。

運動には、このように、「消息不明」が重なる。この重なり合いは、極めて不可解なものであり、極め尽くしがたい面をもっている。ここで「重なり合い」と命名することは、このような極め尽くしがたい連関を表している。運動に重なり合うこの不可解な「消息不明」、この「重なり合い」の連関を量子力学が数学的に表現しているのである。波動方程式の演算子部分は、運動の面を表現し、波動関数が「消息不明」の面を表現している。そして、両者が微分方程式として「重なり合い」の関係そのものを表現しているのである。微分方程式の

解がある特定の波動関数になるのであるが、そこでは、「消息不明」となっているということが「たぶんこうなっているのではないか」ということ、すなわち、「有りそうなこと」(probability)として、数学的には確率(probability)として臆測化され、消息がわかることになるのである。しかし、この微分方程式の解は、もとの「消息不明」そのものを真に解決するものではありえない。こうして、波動関数が解かれ特定の解が見出されるかぎり、「消息不明」がかなたへと去っていったということを意味するのであり、ここに、観測による一定の物理量が限定されることになる。運動する粒子のようなものが観測されるのである。観測の前に、「消息不明」があって、それが突然失われるのではなく、波動方程式で表現されているときに、もうすでに、ある意味で、「消息不明」が消えて「こんな消息かもしれない」という別の姿になっているといえる。なぜなら、それは、解を予想するようなものになっているからであり、波動関数は、なんらかの意味で、もとの「消息不明」を解くからである。しかし、波動方程式そのものは、「消息不明」を表す項と運動を表す項とのかの不可解な連関を表現していることにはなんら変わりはない。微分方程式の解法が必然的なものであり、その意味では、もうあらかじめ波動関数が決定されているはずではないかと異論を唱える人もいるかもしれない。しかし、それは、かの「重なり合い」に基づく決定なのであり、微分方程式という一定の重なり合いのある限定によるものなのである。この重なり合いの根源的な数学的表現が微分方程式という形態になるのである。つまり、この形で「消息不明」は、なるほど微分方程式の必然的解として限定されているが、あらかじめ、かの重なり合いを根拠にしているのである。したがって、量子力学において、重要な意味をもつことは、波動方程式が微分方程式という形態をとっていることであり、それは、なんらかの

意味で、「重なり合い」を解釈したこと、それがある一定の意味で受けとったということである。「重なり合い」そのものの不可解な事情をある面から解釈しているということである。ところが、この「重なり合い」のある特定の解釈こそが自然を解釈する本質的な点、つまり、自然を運動の面から理解しようとする普遍的傾向と一致することになる。

かくして、量子力学そのものが「重なり合い」のある一定の解釈であり、波動方程式がその数学的表現である以上、そこに不可解なものを見て取る者が出てくるのも必然的ということになる。そこに自然の本質を感得する者が現れても不思議ではない。むしろ、まさに、量子力学の中に潜む不可解なものこそ自然そのもののロゴスに係わることでなければならぬ。この謎は、本質的に〈言葉〉の境位に係わるものであり、それが極めて深い意味で矛盾(自らの生誕地を逆の方向に探すという矛盾であり、主語—述語関係にすでに潜んでいる矛盾である)を経験しているということに根があるのである。ヘーゲルは、自然の本質を適切にも「解消されない矛盾」と捉えた。しかし、彼は、Begriffとしての〈言葉〉のある境位から見て、自然をそのように理解したのであり、したがって、まだ、〈言葉〉の「消息不明」とその「門外領域」における矛盾した述語である「運動する」こととの重なり合いを目撃できなかったのである。

ところで、「重なり合い」は、間接伝達論的論理学の立場から見ると、つまり、〈言葉〉からすれば、当然のことであり、なにも不可解なことではない。しかし、それは、すでに述べたように、因果関係でもなければ、根拠関係でもなく、その意味では、それを何であるかという観点で規定しようとする限り、不可解な相貌を呈することになる。したがって、この「重なり合い」を表現している波動方程式は、そのような不可解さを出現させる一定の解釈と考えられるのであり、そのままでは、

不可解な面をもっていることになる。この方程式に基づく、すべての解釈が不可解さを出現させるようになっていっているのである。しかし、波動方程式の演算子部分と波動関数との関係はもっとも根本的に考えるならば、かの「重なり合い」の一定の表現になっている以上、「当然なこと」という意味を同時にもつてなければならぬ。もちろん、波動方程式は、基本的な解釈の姿勢として、運動の面に立たなければならぬ。なぜなら、「消息不明」は、〈言葉〉の方の事態であり、したがって、人間が認識できるものではないからである。しかし、運動そのものがこの「消息不明」ということに他ならない以上、運動の本質を探究する道の奥にこのこととの関係が出てくるのは必然的ということになる。それは、重なり合っていることを運動の方から見ることに立ってこの重なり合いを解釈することになるのである。そして、その数学的表示が微分方程式としての波動方程式になっているのである。ゆえに、微分方程式におけるXつまり、波動関数は、演算子の方からの規定にしたがって、方程式の解として導かれるべきものになる。それは、「消息不明」Xということのある解釈からの解答である。ここに〈言葉〉が「消息不明」になっていたことがいまや運動するもの（粒子として対象化されることが多い）がどこかに有ることの不確定さ、つまり、確率として掬い（救い）取られることになる。そして、このような解釈による掬い（救い）取りは、「門外領域」におけるある事態になることでもあり、何らかの意味で、物理現象になることになる。すなわち、確率の波が干渉することが起こり得るのである。確率というのは、何千回繰り返したら、その確率のような分布になることではなく、また、観察者が無知なためにすべての条件を知らず、したがって、結果についておよそのことしか分からないということではなく、かの「消息不明」の「門外領域」での必然的な様相なのである。

ゆえに、それは実在性を得ている。演算子の方はこれはこれで、単に運動の面のみを表すことはできず、かの重なり合いとの関係ができなければならない事を表現しなければならない。それは、運動の古典的形式（ニュートン力学）がかの「消息不明」の一定の解釈をするために自分をそこへと係わらせようという形態になるのである。

筆者は、波動方程式をある立場から解釈しているのではない。そうではなく、逆に波動方程式、そして、量子力学のほうか、かの「重なり合い」を一定の仕方で解釈しているのである。ゆえに、量子力学は、なんらかの意味で、自然の根本的な構造を明らかにしているといえる。ここで、科学哲学の研究者である原田雅樹氏が『哲学研究』第584号で述べているある重大な記述を紹介しよう。

「しかしながら、ヨルダンにとって、シュレーディンガーの量子的波動関数は、単なる確率分布関数でなく、物理的な何かなのである。」（原田雅樹：「科学作品の現象学」の試み、哲学研究、第584号、42、2007）

波動関数が一面、確率分布関数であるとともに単にそれだけではなく、「何か」であること、これこそ、量子力学の眼目である。量子力学はこの「物理的な何か」を汲んでいるのであり、すべての物理学者、否、極端に言えばすべての科学者はこの「何か」を捉えようとしているのでなければならぬ。この「何か」こそ波動関数の未知の源泉である「消息不明」に他ならない。波動方程式はこの源泉から波動関数を、しかも、必然的に、「有りそうな（probable）」という意味をもつ確率分布関数を、汲むという構造になっているのである。

次に、量子論における波と粒子の観測が同時にできないという問題を考えてみたい。

上述したように、波と粒子の二重性は、間接伝達論的論理学における「門外領域」のロゴスを写し取っている。すなわち、それは、

〈言葉〉が「門外領域」で「消息不明」になっていることとそれが運動ということであることの重なり合いを言うものである。すると、一見すると、両者が二重になっている以上、両者の現象が同時に観測されてもよさそうに見える。しかし、実際には、片方を観測するともう片方の現象はいわば消えてしまうのである。したがって、二重スリットの実験で、一方のスリットに粒子がどちらを通るかを観測できる装置を付けるなら、干渉縞は現れない。しかし、この装置を付けなければ、干渉縞が生ずるのである。要するに、粒子と波動の両者を同時に観測することはできない。では、この事態をどのように理解したらよいのだろうか。

この謎を解く鍵は、かの「重なり合い」の本性を熟慮することにある。「消息不明」ということは、すでに述べたように、粒子が消息不明になっているのではなく、〈言葉〉が「門外領域」に出て行ったことで「消息不明」になっていることである。この「消息不明」が運動するという他に他ならないのである。しかし、運動しているのは、今度は、〈言葉〉であるとはいえない。たしかに、〈言葉〉は、「門外領域」で自己を見失って、自己の外に出て行く。それが運動なのであるから、運動しているのは〈言葉〉であろうと考えられよう。しかし、「門外領域」に出て行った言葉は、もはや、〈言葉〉という姿をしていないのである。厳密に言えば、その姿もある意味で「分からない」。しかし、それは、運動する対象になっているのである。したがって、運動するということは、そのまま、〈言葉〉が「消息不明」になっているということであり、〈言葉〉が「消息不明」になっていることが運動するものが見出されることである。それゆえ、もしも、運動するものをどこかに見出した場合には、それがそもそも「消息不明」ということであり、その時点で、「消息不明」が終わり、「消息」が明らかにされたということではない。〈言葉〉

が「消息不明」になっていることが「運動する」ということであり、粒子が「消息不明」になっているわけではないからである。両者が同時に観測されるということは、本来的な「重なり合い」とは矛盾することになるのである。同様に、「消息不明」の方のことがらが観測されることは、それがつまり、運動するということであり、後者を前者から分けて後者を前者と同時に見出すということは矛盾することになる。すなわち、「消息不明」と運動とは同じことであり、同時に別のこととして観察することは原理的に不可能である。「重なり合い」の本質からその不可能性が出てくるのである。

このようなことがらを分かりやすい喩えて説明することは本質的に不可能なのであるが、それでも、このことは、透明なガラス板で喩えることもできなくはない。それは、表(運動)と裏(消息不明)をもっているが、表を見ると裏も見えていて裏も表もない。裏から見ても同じである。しかし、裏と表は重なっている。透明でないものについては、裏と表は別々である。しかし、透明なガラス板の場合は、裏からみるとそれが表全体なのであり、表からみてもそれは裏全体になっているのである。裏と表のこの重なり合いを両者が別々のものとして同時に見ることはできない。どちらかから見れば、それは、同じ一つのことなのである。どちらかから見れば、例えば、表から見れば、裏と一つ(裏表がなくなる)であり、他方は、つまり、裏は、その瞬間に消えている。粒子が観測された(表から見た)瞬間に確率の波(裏)が消えてしまうのではない。粒子が観測されるということはそのまま確率の波が透けることである。その観測は、二重性の全体になるのである。

先に述べたように、「消息不明」と波動関数とはまったく同じとはいえない。「消息不明」というのは、〈言葉〉のことがらであり、粒子がどこにあるのか不明であるということと

は同一ではない。波動関数は、運動のほうから解釈されている限りの「消息不明」であり、確率的になっているのである。では、粒子が観測されたとき、このようなある解釈された「消息不明」はどうなるのか。解釈された「消息不明」は運動的な面をもつから、同時に観測され得るのではなからうか。根本的には、解釈された「消息不明」、すなわち、粒子の存在確率も、粒子のことがらではなく、〈言葉〉の方の事柄なのである（後で言及されるように、虚数として表されることから）。それは、運動とは何かと言うところのロゴス的なものを意味している。したがって、それがたとえ解釈されたものではあっても、「消息不明」の本質的なものから成ると考えられ、同時に測定することは不可能になると思われるのである。すなわち、どちらかの測定が他方のことになるのであり、両者を区別できるものとして両者を同時に見出す試みは、両者が重なり合うということ、すなわち、この場合は波動方程式の形態、とやはり矛盾すると思われる。

ところで、「観測」ということは、「重なり合い」を一方ではこう見て、他方ではこう見るというような、主観的な見方ということではない。「消息不明」になっているのは、〈言葉〉であるから、主観的なことがらも、このような〈言葉〉の境遇から逆に生じているのである。そして、「消息不明」になることで「門外領域」に〈言葉〉は出て行ったのであり、ここでは、〈言葉〉は、自己を見失って自己の外に出て行くのであり、これが「運動する」ということなのである。しかし、「消息不明」になったから、自己の外に出て行くのではない。「消息不明」になることがそのまま、他ならぬ、自己の外に出て行くことなのである。ここで言われている、この「そのまま、他ならぬ」がかの「重なり合い」である。今や、主観の方も主観的に「運動するもの」を「観測する」のである。ゆえに、「観測する」ということと「重なり合い」とはそれ自体、切り離

されえない関係にある。ところが、「消息不明」の方は、主観によって、それが〈言葉〉のことがらであると理解されることはない。それは、「運動」に係わるようななにかとして解釈される以外ないのである。すでに述べたように、波動関数は、こうして、粒子が運動に関して観測される場合の確率を与えるというように理解されることになる。波動関数自身は、その意味では、ことがらそのものを表しているのではなく、本質的な主観性を根底にしていることになる。むしろ、本来のことがらは、かの「重なり合い」にあるのであるから、波動方程式の演算子部分と一方の波動関数との両者の関係が措定されているというところにある。なんらかの意味で、一方に「運動」の面を表すもの、他方に「どうなっているかわからない」、すなわち、「消息不明」の面を表すもの、この両者が並び重なっていなければならない。つまり、この形式そのものにすでに、粒子と波とが両者同時には測定されないということが含まれているのである。

観測ということを一般的に「相互作用」と考えることで観測が主観の任意な働きであるという面を取り除くことができるとも考えられる。しかし、相互作用するのは、「運動するもの」であり、すでに「運動」の方から観測されているということである。「消息不明」の方に「相互作用」ということは考えられない。なぜなら、それは本質的には、主語と述語の関係だからである。〈言葉〉が転倒夢想的に主語の向こうに述語を探すことが「消息不明」ということである。運動として物の相互作用がなされるならば、それは、先の「透明なガラス板の喩え」でいうなら、「消息不明」になっていることを透かし見たことなのである。それはあたかも粒子に付随する波が一瞬に消えたようになることを意味する。「裏」はもはや見えなくなっている。

さて、波動関数は、上記のように、かの「重なり合い」の一方である「消息不明」の面

を表現している。それは、〈言葉〉の方から見られた「門外領域」の有様であり、したがって、「運動」として対象化されることである。ゆえに、「消息不明」そのものは、物理現象として実在的なことではない。物理現象になるのは、解釈された限りの波動関数、確率分布関数である。波動関数は、その本質的なものとして実在性を否定する面を何らかの仕方で表現していなければならない。そうしないと、それは、もっぱら物理現象に属するものとなり、「重なり合い」を表現することができなくなるのである。こうして、波動関数は一般に複素数なのである。つまり、それはそれ自身としては、実在的な面をまったく持たない形式になっているのである。もしも、波動関数がこのような非実在的な形式をもたないとすれば、それは、まったく、「消息不明」の面を表現しなくなり、ゆえに、確率分布関数ともならない。波動関数は必然的に複素数でなければならない。もしも、それが、実数の関数であるばあいには、「運動」の面を表す演算子部分との関係が出来なくなるにちがいないのである。「消息不明」を確率へ、つまり、「有り」へと転じることは複素数とその共役するものと掛け合わされて実数化されることによってである。複素共役は、虚数の部分の否定を持つのであり、これとの積は、もとの非実在性が否定されて実在化すること、転ずることを意味する。単なる二乗ではなく、自分の否定を含むもとの二乗によって複素数としての波動関数は、物理現象として実在へと転ずるのである。しかし、実在化といっても元の「消息不明」を表現するものでなければならず、こうして、それは「確率」という意味を必然的に持つことになる。故に、「確率」の波ということが成立するのは、根本的には、波動関数の虚数部分が影響しているためでなければならない。波動関数が複素数であるのは、すでに述べたように、「消息不明」が粒子の実在的な面ではないことを表している。そ

して、それは、虚数の部分によって表示されているのである。

次に、〈言葉〉が消息不明になっていることがそのまま、「門外領域」、いいかえれば、「外で」なにかが「運動する」ということになっていることについて、更に踏み込んで考察しよう。

〈言葉〉の消息不明ということは、〈言葉〉の方から見て、それがどうなったか分からなくなっているということである。なぜなら、主語－述語関係の中から、〈言葉〉は〈言葉〉として述語の方へ向かうことができなくなり、逆に主語の向こうへと自らの生誕地を探すようになっているからである。しかし、このことは、人間の思惟には掛からないことであり、人間の思惟には、その対象化されたもの、すなわち、「運動」だけが掛かるのである。しかし、「運動」は、〈言葉〉のほうからすれば、本質的には、「憶測」されたことである。「どうなったか分からなくなった」ということを〈言葉〉は、「自己から逃走していく」というように「憶測（想像といってもよい）している」からである。「門外領域」、すなわち、いわゆる自然界では、この「〈言葉〉の憶測」が「動く対象」として観測されるのである。しかし、この「〈言葉〉の憶測」は、やはり、人間の思惟には掛からないことに属している。それは、〈言葉〉の為す憶測であって、人間の為し得るようなことではない。「〈言葉〉の憶測」によって動くものというようなことが人間には知られる、すなわち、主観的ではなく、主観にはどうにもならないある客観的なことが認識されるのである。〈言葉〉にとっては、どうなっているか分からなくなっているということのほう、まことであり、「自己から逃走していく」ということは、〈言葉〉の為す「憶測」である。しかし、「門外領域」での〈言葉〉の境遇から見ると、この憶測の方が実在的ということになる。動くものということがらには、このような論理構成があるのでなければならない。すなわち、動くもの、あるいは、動く

ということは、それが実在的であるかぎり、本質的な憶測性、いわば、虚的(虚構的とも言える)なものを含んでいて、しかも、この虚的なものは人間の思惟には掛からない。そして、この虚的なものは、実在する「動くこと」の本質構成部になっていなければならないのである。波動関数の複素数形式は、そのような本質構成を表現している。この形式は、実数部分と虚数部との和になっているが、厳密には、両者は和にはならない。虚数部、すなわち、〈言葉〉が憶測しているという面は、むしろ、〈言葉〉からすれば、実の方に属するのであり、実数部の方、すなわち、〈言葉〉が自己から逃走するという面、がかえって虚なのである。しかし、「門外領域」からすれば、実数部のほうが実的であって、虚数部は、まさに、虚的となっているのである。それは、人間の思惟には全く掛からない部分である。複素数形式のプラス表記の意味は、本来的には、人間の思惟に掛からない面が実在(実数)の面を構成していることを言うのである。あるいは、それは、動くということ、ないしは、自然ということが実在部と虚部との思惟できない関係において成立しているということの意味しているのである。

ここで、波動関数の実数部が、運動を表現していると理解されぬように注意を促したい。波動方程式の演算子部がいわゆる運動の面を表現しているのであり、波動関数の部分はどこまでも本質的には「消息不明」を表現しているのである。しかし、その数学的表現である複素数の実数部分は不要であり、虚数部だけで波動関数は構成されるということではない。〈言葉〉の「消息不明」は、人間の思惟には掛からないことからであり、しかも、そこに「憶測」が潜んでいるから、虚数部だけでよいのではないかと思われるかもしれない。しかし、この虚的な言葉の為す「憶測」は「自己から逃走する」という憶測であり、これは、「門外領域」においては、運動として、

実的なものとして対象化されるものなのである。ゆえに、もっとも厳密に考えられるならば、「消息不明」になっていることは、同時に「自己の外へと自己から逃走していく」という〈言葉〉の為す「憶測」を必ず伴うのでなければならない。すなわち、波動関数は、「消息不明」を表現するものとして、或る「かもしれない」、つまり、確率的な本性をもつとともに、複素数の形式をもって、虚なる面(憶測)とその虚なる面の故のある実なる内容(自己から外へ抜け出て逃走する)との両者から構成されなければならないのである。そして、前者が虚数部、後者が実数部になるのである。しかし、実は、この実数部は、〈言葉〉の為す憶測内容として本質的に虚数部に属すことである。だから、複素数における実数部は、実在的なことではなく、むしろ、虚数部とある関係にあるということを表しているのである。この関係が目立たないながら、実数部と虚数部との間にあるプラス表記に当たる。それは、無造作に付け加えられているということではなく、実数部と虚数部において虚数部のほうが支配的であるということをお話しているのである。こうして、「消息不明」を表現する複素数形式によって、「波動関数」は、運動に関わる確率分布関数になることができるのである。

このようにして、波動方程式の波動関数は、複素数形式でなければならないことが必然的であるが、こうした「解釈」はいかにももっともらしい学術的解釈と見なされるかもしれない。しかし、物理学の中に量子力学が登場し、それを数学的に表現する根本理論である波動方程式が複素数形式にならねばならないということは、物理学全体にとって重大な意味をもつべきであろう。なぜなら、この形式によらなければ、量子力学そのものが成立しなくなるからである。ちなみに、量子力学に関するある教科書には、次のように載っている。

「1次元での平面波は $\psi = A \sin(kx - \omega t)$ や

$\text{Acos}(kx-wt)$ で表されるとも考えられるが、それでは不相当である。量子力学で扱う波動量は本質的に複素数である。」(猪木慶治・河合光：基礎量子力学，講談社サイエンティフィック，2007年，p.33.)

量子力学における波動量が本質的に複素数であるのは、理論構築上そうになっていることが必要であるからではなく、逆に複素数であるから理論が、そして、その数学的表現が成立するのである。虚数をともなう量の意味が根本的に問われなければならないのであり、上で述べられたことは、けっして学術的な解釈というようなものではない。実験事実が波動方程式の理論と一致していることは、波動関数が複素数でなければならないことを客観的に証明している。波動量が複素数であることも、客観的な意味があるはずでなければならないだろう。しからば、虚数の量の客観性と必然性を人はどのように演繹するのであろうか。このことを深く考える人には、我々の解釈がいわゆる「解釈」というようなものではないことが理解されるはずである。それでも、納得できない人は、ご自身で波動関数が複素数形式でなければならないことをある根本原理から演繹してみしてほしい。

次に、量子力学と数学との関係について考えてみたい。物理学が上のように、複素数と本質的な繋がりをもつようになったことは、数学にとっても注目されるべきことと考えられる。ある物理現象の法則を数学的に表現したということ、量子力学における数学の関与とは異質的なものに見える。なぜなら、ある物理量を観測する場合の「確率」、あるいは期待値が全く数学的な性質、ここでは、複素数というようなものによって決定されるからである。

間接伝達論的論理学の「門外領域」において初めて「外」というようなことが〈言葉〉の方から命名されるようになる。カントの哲学においても、空間は外的直観の形式と言わ

れながら、「外」ということが直接的に前提されている。「外」の可能性の根拠はその哲学においては明かされることはない。ヘーゲルにおいては、「外」は理念の外化という仕方、一応、媒介されている。しかし、「外」が命名されたのではないから、「外化」そのものを構成する「外」はやはり最初から前提されているのである。「外」が〈言葉〉の方から命名されるようになって、ようやく、数学というものの本物の姿も見えるようになるのである。「門外領域」で「外」というようなことが開かれるようになる。〈言葉〉が「消息不明」になるとそこが「外」と〈言われる〉「言(こと)」なのである。カントの「外的」とかヘーゲルの「外化」とかは皆、この〈言葉〉が言い始めた「外」によって可能になる。「外」に出た〈言葉〉は、〈言葉〉としては、その姿を変えて語るしかない。そして、この姿を変えてしまった〈言葉〉が数学的ということである。ところが、姿を変えて語る〈言葉〉は、本質的に〈言葉〉の為す憶測であり、想像である。かくして、数学のもっとも根源的奥所には、想像ないしは、憶測が潜んでいる。しかし、ここで、数学そのものの成立基盤に潜む憶測とか想像は、人間が為すようなことではないという点は、どこまでも念頭に置かれなければならない。人間的な想像や憶測から数学が成り立つなどとは全く言えないのである。しかし、それにもかかわらず、数学の成立基盤には、非常に深い意味での「詐術」が潜んでいる。筆者は数学の価値を貶めようとこのようなことを言うのではない。むしろ、数学が上で述べられたような「外」の本質的事象であることを「詐術」的と名付けるのである。〈言葉〉は、「門外領域」に、つまり、命名された「外」に在って、なにか「詐術」を為すのである。命名された「外」で為される「詐術」は、もはや、〈言葉〉ではなくなっている、ある「姿を変えたもの」が成すのであり、これが「数学」的なものである。とてもあの〈言葉〉

とは思えないような姿に変わってしまったものが数学であり、詐術師になって「数学する」のである。〈言葉〉にとっての「外」は単に空間ではなく、〈言葉〉がペテンを為すような処なのである。このような「外」での〈言葉〉しか出来ないような、人間の思惟にとってはただ不可思議な詐術が数学的なことになってしまうのである。しかし、我々は、例えば、 $1 + 1 = 2$ を誰も詐術とは考えない。むしろ、あらゆる詐術から完全に免れているのが数学的真理だと考えるのである。いったい、 $1 + 1 = 2$ のどこに詐術があるというのか、と詰問されるであろう。残念なことに、我々の思惟は、〈言葉〉が門外領域で為す詐術をそれとして認めることはできない(全く同じ1が二つ有るのはなぜだろう。1とは一つきりということではないのか、と不思議がる天才的な人も中には居るとしても)。しかし、この詐術が、自然の本質と堅く結ばれるのである。自然の本質が語りだされるところには、詐術が活動しなければならず、そうでないとすれば、自然の本質が明かされないのである。ゆえに、量子力学は、なんらかの意味で、数学のこの本性との結び目を露にしていると考えられる。それは、数学を使ったというよりも、数学の基盤に迫っているものでなければならない。量子力学と数学、両者は、相互にその本質を照らし合う関係にあるのでなければならない。

〈言葉〉が「外」にあるとき、と言われたのであるが、厳密には、〈言葉〉が「外」にあると想像されるとき、と言われるべきである。「外」では、〈言葉〉は詐術を為すのであり、〈言葉〉の「外」とは、このようなペテンがなされる処なのである。つまり、「外」というのは、我々の考え付くような「外」ではなく、〈言葉〉が詐術をなす処である。そこには、ペテンのテクニクというようなことがあり、故に、一般に、自然の奥には、窮めつくせぬテクニクが、巧妙な技術が潜む。〈言葉〉

はこのような詐術を為すときには、〈言葉〉の姿をとるのではない。それは、数学という姿になっているのである。ゆえに、数学は〈言葉〉とは異なるのでなければならない。しかし、〈言葉〉は「外」で、この姿になって「外」で振舞うのである。このような意味では、数学はエレメント的矛盾(〈言葉〉が転倒夢想して主語の彼方に自身の生誕地を目指すという矛盾)の基盤上で無矛盾的体系になっていることになる。数学は論理学から基礎付けられない。むしろ、逆に、その全体系の無矛盾性は、論理的な矛盾に根ざしているのである。

ヘーゲルほどの炯眼の哲学者ですら、数学が〈言葉〉の「外」に関係していることを見抜くことはできなかった。しかし、彼は、概念と数学との関係に「外」というようなことが係わっていることには気付いていたのである。数学が抽象的で外的なものであることを一貫してヘーゲルは主張しているが、その主張は、なにかつまらぬ、ごく当たり前の考えのように見えるかもしれない。しかし、概念とその外的なものとの関係は、〈言葉〉と「外」との関係を映していると言えるのであり、したがって、ヘーゲルの眼差しは、数学の根源的なものに向けられているのである。理念が外化するとそこは、「外」ではなく、空間になっていることと、数学の本質がペテンのテクニクであると見抜けぬこととは見事に対応する。

数学の本性であるかの詐術は、思惟にはそれと認識されないのであるが、すなわち、思惟はそれを騙しだとは認識できずに騙され続ける。夢の中でも $1 + 1 = 2$ となっているほどであるが、〈言葉〉は、そうになっていることがよく分かるのである。あそこであんなことをしている、と〈言葉〉のことであるからよく分かるのである。ところが、「あそこで」というのは、「門外領域」であって、〈言葉〉が「消息不明」になってしまったということである。それが運動に他ならず、この重なり

合う事態を量子力学が表現するようになったのである。「消息不明」になってどうなったか、〈言葉〉としては分からなくなったのではあるが、そのところで、〈言葉〉は、姿を数学に化して詐術を為すのである。ゆえに、詐術は、「消息不明」の固有性と考えられる。こうして、量子力学と数学は、相互に係わりあうことになる。

では、〈言葉〉の詐術とはどのようなことなのだろうか。ここでは、それを詳しく説き明かすことはできない。しかし、ヘーゲルの「論理学」における量の弁証法に登場する数学基礎論との関連を指摘しておきたい。それは、極めて、大雑把に言うならば、次のような比例式で表現される。

概念 (Begriff) : 数学基礎論 = 〈言葉〉 : 詐術

この比例式は、ことからの本質を十分に表現していない。しかし、高い視座から見れば、的を外れていない。詐術は、連続の問題と深く関連するのである。〈言葉〉は「門外領域」で、転倒夢想して主語の彼方に自己の生誕地を探るのであるから、自己を外れてしかも自己と連続する(外的に自己と繋がるということ=実は自己と一つにはなれない)ことになる。分離と連続とが外的な仕方と同一となるのである。しかし、「門外領域」では決して概念的な分離と連続の関係が起きているのではない。「門外領域」では、分離と連続の関係は、〈言葉〉が詐術を為すということなのである。こうした深遠な関連が上記の比例式で表現されているのである。

ところで、数学と波動方程式が関わりあう必然性が上述のように示されるのであるが、その関わりあいには特に、波動関数に要所があるのでなければならない。なぜなら、波動方程式の波動関数の部分が「消息不明」を表現しているからである。波動方程式の波動関数の部分は、本質的に数学の本性である詐術に係わるのでなければならないことが明らかと

なる。

ところで、すでに述べたように、波動関数の複素数形式において、虚数部は〈言葉〉の為す憶測を表現していた。したがって、それは、まさに、数学の本性、すなわち、詐術を為すということと一致していることになる。この憶測の内容は、〈言葉〉が自己を去って自分から逃走するということであり、これは、複素数の実数部分に相当していた。このような複素数の形式をもって「消息不明」の非実在性が示されるのであった。ところで、この複素数の実数部分は、〈言葉〉が自己から逃走することとしてすでに述べたように、分離と連続、ないしは、連続と非連続ということがらに關係している。しかし、ここでは、ヘーゲル的に概念的に捉えられた、連続の問題が問われているのではなく、〈言葉〉の憶測におけるその内容としての連続と非連続が問われているのであり、したがって、複素数の固有の問題が問われているのである。しかも、この複素数の問題は、純粹数学的に孤立的形式的に問われているのではなく、「消息不明」ということの中で行われていることとして、「有りそうな」ということ、すなわち、「確率」と不可分な関係において問われるのである。かくして、波動関数に関して、数学の根幹の問題が開顕されるようになるのである。波動関数の問題が、数学そのものの根元問題を照らすようになり、同時にこのような照明が物理学の根元をも照らし出すようになるはずである。この予言が当たるかどうか、それは、未来に委ねられなければならない。

ところで、波動関数、あるいは物理学と数学とのこうした根元的な関わりあいを数学の方から探求する試みがおそらくは、フォン・ノイマンによるヒルベルト空間による量子力学の数学的基礎付けと考えられる。複素ヒルベルト空間と波動関数との関連の中に上記の根元的関係が潜んでいるかどうか、彼の『量子力学の数学的基礎』(原著: J. von Neumann:

Mathematische Grundlagen der Quantenmechanik, Julius Springer, Berlin, 1932.)
をこうした観点から詳しく検討する必要がある。また、ここでは言及されなかった時間について、「消息不明」との連関を論じ、アインシュタインの相対性理論との関係も示すべき

であろう。しかし、「間接伝達論的論理学」の「注釈部」としては、これらの課題を今後委ねることにしたい。なお、時間と運動との基本的洞察内容については、前掲の『「間接伝達論的論理学」の「門外領域」のための序説』を参照されたい。